

どんぐり

寺田寅彦

青空文庫

もう何年前になるか思い出せぬが日は覚えている。暮れもお話しまた二十六日の晩、妻は下女を連れて下谷摩利支天の縁日へ出かけた。十時過ぎに帰つて来て、袂からおみやげの金鍔と焼き栗を出して余のノートを読んでいる机のすみへそつとのせて、便所へはいつたがやがて出て来て青い顔をして机のそばへすわると同時に急に咳^{せき}をして血を吐いた。驚いたのは当人ばかりではない、その時余の顔に全く血のけがなくなつたのを見て、いつそう氣を落としたとこれはあとで話した。

あくる日下女が薬取りから帰ると急に暇をくれと言い出した。このへんは物騒で、お使いに出るときつといやないたずらをされ

ますので、どうも恐ろしくて不気味で勤まりませぬと妙な事を言う。しかし見るとおりの病人をかかえて今急におまえに帰られては途方にくれる。せめて代わりの人のあるまで辛抱してくれと、よしやまだ一介の書生にしろ、とにかく一家の主人が泣かぬばかりに頼んだので、その日はどうやら思い止まつたらしかつたが、

翌日は国元の親が大病とかいうわけでとうとう帰ってしまう。掛け取りに来た車屋のばあさんに頼んで、なんでもよいからと桂庵けいあんから連れて来てもらつたのが美代みよという女であつた。仕合わせとこれが氣立てのやさしい正直もので、もつとも少しほんやりしていて、たぬきは人に化けるものだというような事を信じていたが、とにかく忠実に病人の看護もし、しかられても腹も立てず、

そして時にしくじりもやつた。手水鉢ちようすばちを座敷のまん中で取り落として洪こうずい水を起こしたり、火燐こたつのお下がりを入れて寝て蒲團ふとんから畳まで径一尺ほどの焼け穴をこしらえた事もあつた。それにもかかわらず余は今に至るまでこの美代に対する感謝の念は薄らがぬ。

病人の容体はよいとも悪いともつかぬうちに年は容捨なく暮れてしまふ。新年を迎える用意もしなければならぬが、何を買つてどうするものやらわからぬ。それでも美代が病人のさしづを聞いてそれに自分の意見を交ぜて一日忙しそうに働いていた。大晦おおみそ日の夜の十二時過ぎ、障子のあんまりひどく破れているのに気がついて、外套がいとうの頭巾ずきんをひつかぶり、皿さら一枚をさげて森川もりかわちよ

町^{まち}へ五厘^{ごり}の糊^{のり}を買^ういに行つたりした。美代はこの夜三時過ぎまで結びごんにやくをこしらえていた。

世間はめでたいお正月になつて、暖かい天氣が続く。病人も少しずつよくなる。風のない日は縁側^{えんがく}の日向^{ひなた}へ出て来て、紙の折り鶴^{づる}をいくつとなくこしらえてみたり、秘藏^{ひざむ}の人形の着物を縫うてやつたり、曇つた寒い日は床の中で「黒髪」をひくくらいになつた。そして時々心細い愚痴^{ぐち}っぽい事を言つては余と美代を困らせ^{うなづ}る。妻はそのころもう身重になつていたので、この五月には初産^{はつさん}という女の大難^{たいやく}をひかえている。おまけに十九の大厄^{ういざ}だと言^う。美代が宿入りの夜など、木枯らしの音にまじる隣室^{うつ}のさびしい寝息^{ねぎ}を聞きながら机の前にすわつて、ランプを見つめたまま、

長い息をすることもあつた。妻は医者の間に合いの気休めをすつかり信じて、全く一時的な気管の出血であつたと思つていたらしい。そうでないと信じたくなかったのであろう。それでもどこにか不安な念が潜んでいると見えて、時々「ほんとうの肺病だつて、なおらないときまつた事はないのでしょうかね」とこんな事をきいた事もある。またある時は「あなた、かくしているでしよう、きっとそうだ、あなたそうでしよう」とうるさく聞きながら、余の顔色を読もうとする、その祈るような気づかわしげな目づかいを見るのが苦しいから「ばかな、そんな事はないと言つたらない」と邪慳じやけんな返事で打ち消してやる。それでも一時は満足する事ができたようであつた。

病気は少しづつよい。二月の初めには風呂^{ふろ}にも入る、髪も結うようになった。車屋のばあさんなどは「もうスッカリ御全快だそ^{うで}」と、ひとりできめてしまつて、そつとふところから勘定書きを出して「どうもたいへんに、お早く御全快で」と言う。医者の所へ行つて聞くと、よいとも悪いとも言わず、「なにしろちょうど御妊娠中ですからね、この五月がよほどお大事ですよ」と心細い事を言う。

それにもかかわらず少しづつよい。月の十何日、風のない暖かい日、医者の許可を得たから植物園へ連れて行つてやると言うとたいへんに喜んだ。出かけるとなつて庭へおりると、髪があんまりひどいからちよつとなでつけるまで待つてちようだいと言う。

ふところ手をして縁へ腰かけてさびしい小庭を見回す。去年の枯れ菊が引かれたままで、あわれに朽ちていて、それに千代紙の切れか何かが引つ掛かつて風のないのに、寒そうにふるえている。手水鉢^{ちようすばち}の向かいの梅の枝に二輪ばかり満開したのがある。近づいてよく見ると作り花がくつつけてあつた。おおかた病人のいたずららしい。茶の間の障子のガラス越しにのぞいて見ると、妻は鏡台の前へすわつて解かした髪を握つてぱらりと下げ、櫛^{くし}をつかつてている。ちよつとなでつけるのかと思つたら自分で新たに巻き直すと見える。よせばよいのに、早くしないかとせき立てておいて、座敷のほうへもどつて、横になつてけさ見た新聞をのぞく。早くしないかと大声で促す。そんなにせき立てると、なおできや

しないわと言う。黙つて台所の横をまわつて門へ出て見た。往来の人がじろじろ見て通るからしかたなしに歩き出す。半町ばかりぶらぶら歩いて振り返つてもまだ出て来ぬから、また引っ返してもと来たとおり台所の横から縁側へまわつてのぞいて見ると、妻が年がいもなく泣き伏しているのを美代がなだめている。あんまりだと言う。一人でどこへでもいらつしやいと言う。まあともかくもと美代がすかしなだめて、やつと出かける事になる。實にいい天氣だ。「人間の心が蒸発して霞になりそうな日だね」と言つたら、一間ばかりあとを雪駄を引きずりながら、大儀そうについて来た妻は、エヽと氣のない返事をして無理に笑顔をこしらえる。この時始めて気がついたが、なるほど腹の帶の所が人並みよりも

いぶ大きい。あるき方がよほど変だ。それでも当人は平氣でくつついて来る。美代と二人でよこせばよかつたと思いながら、無言で歩調を早める。植物園の門をはいつてまつすぐに広いたらたら坂を上つて左に折れる。穏やかな日光が広い園にいつぱいになつて、花も緑もない地盤はさながら眠つたようである。温室の白塗りがキラキラするようでその前に二三人ふところ手をして窓から中をのぞく人影が見えるばかり、噴水も出でいぬ。すいれん睡蓮もまだつめたい泥どろの底に真夏の雲の影を待つてゐる。温室の中からガタガタと下駄の音を立てて、田舎いなかのばあさんたちが四五人、きつねにつままれたような顔をして出て来る。余らはこれと入れちがつてはいる。活力の満ちた、しめつぽい熱帶の空気が鼻のあなから

脳を襲う。椰子の木や琉球の芭蕉などが、今少し延びたら、この屋根をどうするつもりだろうといつも思うのであるが、きようもそう思う。ハワイという国には肺病が皆無だとだれかの言つた事を思い出す。妻は濃緑に朱の斑点のはいつた草の葉をいじつているから「オイよせ、毒かもしけない」と言つたら、あわてて放して、いやな顔をして指先を見つめてちよつとかいでみる。

左右の回廊にはところどころ赤い花が咲いて、その中からのんきそうな人の顔もあちこちに見える。妻はなんだか気分が悪くなつたと言う。顔色はたいして悪くもない。急になま暖かい所へはいつためだろう。早く外へ出たほうがよい、おれはも少し見て行くからと言つたら、ちよつとためらつたが、おとなしく出て行つ

た。あかい花だけ見てすぐ出るつもりでいたら、人ととの間へはさまって、ちょっと出そこなつて、やつと出て見ると妻はそこにはいぬ。どこへ行つたかと見回すと、はるか向こうの東屋のベンチへ力なさそうにもたれたまま、こつちを見て笑つていた。

園の静けさは前に変わらぬ。日光の目に見えぬ力で地上のすべての活動をそつとおさえつけてあるように見える。気分はすっかりよくなつたと言うから、もうそろそろ帰ろうかと言うと、少し驚いたように余の顔を見つめていたが、せつかく来たから、もう少し、池のほうへでも行つてみましようと言う。それもそうだとそつちへ向く。

崖がけをおりかかると下から大学生が二三人、黄色い声でアリスト

ートルがどうしたとかいうような事を議論しながら上つて来る。

池の小島の東屋に、三十ぐらいのめがねをかけた品のいい細君が、海軍服の男の子と小さい女の子を遊ばせてている。海軍服は小石を拾つては氷の上をすべらせて快い音を立てている。ベンチの上にはしわくちやの半紙が広げられて、その上にカステラの大きな切れがのつている。「あんな女の子がほしいわねえ」と妻がいつにない事を言う。

出口のほうへと崖の下をあるく。なんの見るものもない。後ろで妻が「おや、どんぐりが」と不意に大きな声をして、道わきの落ち葉の中へはいって行く。なるほど、落ち葉に交じつて無数のどんぐりが、凍てた崖^{いがけした}下の土にころがっている。妻はそこへし

やがんで熱心に拾いはじめる。見る間に左の手のひらにいっぱいになる。余も一つ二つ拾つて向こうの便所の屋根へ投げると、カラカラところがつて向こう側へ落ちる。妻は帯の間からハンケチを取り出して膝の上へ広げ、熱心に拾い集める。「もう大概にしないか、ばかだな」と言つてみたが、なかなかやめそうもないから便所へはいる。出て見るとまだ拾つている。「いったいそんなに拾つて、どうしようと言うのだ」と聞くと、おもしろそうに笑いながら、「だつて拾うのがおもしろいじやありませんか」と言う。ハンケチにいっぱい拾つて包んでだいじそうに縛つているから、もうよすかと思うと、今度は「あなたのハンケチも貸してちようだい」と言う。とうとう余のハンケチにも何なんごう合かのどんぐ

りを満たして「もうよしてよ、帰りましょう」とどこまでもいい
気な事をいう。

どんぐりを拾つて喜んだ妻も今はない。お墓の土には苔の花が
なんべんか咲いた。山にはどんぐりも落ちれば、鶲の鳴く音に落
ち葉が降る。ことしの二月、あけて六つになる忘れ形身のみつ坊
をつれて、この植物園へ遊びに来て、昔ながらのどんぐりを拾わ
せた。こんな些細な事にまで、遺伝というようなものがあるもの
だか、みつ坊は非常におもしろがつた。五つ六つ拾うごとに、息
をはずませて余のそばへ飛んで来て、余の帽子の中へひろげたハ
ンケチへ投げ込む。だんだん得物の増して行くのをのぞき込んで、
頬を赤くしてうれしそうな溶けそうな顔をする。争われぬ母の面

影がこの無邪気な顔のどこかのすみからチラリとのぞいて、うす
れかかった昔の記憶を呼び返す。「おとうさん、大きなどんぐり、
こいも／＼／＼／＼みんな大きなどんぐり」と小さい泥どろだら
けの指先で帽子の中に累々としたどんぐりの頭を一つ一つ突つ
く。「大きいどんぐり、ちいちゃいどんぐり、みいんな利口など
んぐりちゃん」と出たらめの唱歌のようなものを歌つて飛び飛び
しながらまた拾い始める。余はその罪のない横顔をじつと見入つ
て、亡妻のあらゆる短所と長所、どんぐりのすきな事も折り鶴の
じょうずな事も、なんにも遺伝してさしつかえはないが、始めと
終わりの悲惨であつた母の運命だけは、この子に繰り返させたく
ないものだと、しみじみそう思つたのである。

（明治三十八年四月、ホトトギス）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第一巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

入力：田辺浩昭

校正：田中敬三

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

どんぐり

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>